

新和合

3  
2022

新和合年画刊



# 富嶽一景

能村 研三

新宿・百人町

俳句文学館に通勤するようになって五年が経った。都会への電車通勤という今までにはない経験であったが、ラッシュ時の通勤にも慣れてきた。

J R 大久保駅の北口に降りると、ガード下の巨大壁画が目に見え込んでくる。戦国武将の合図で一斉射撃する鉄砲隊が、なんともやわらかいタッチで描かれている。コリアンタウンで知られる大久保駅前に、なぜ鉄砲隊の壁画があるのか、最初はわからなかったが、百人町という歴史にゆかりのある名前からいろいろなることがわかった。

新宿区の花は「つつじ」であるが、それもこの百人町と縁があることがわかった。

関ヶ原の戦いの後、現在の百人町に同心百人が配属された鉄砲組は「百人組」と呼ばれ、江戸城の警備のほか、将軍が日光東照宮などに参詣するときに警護にあたったそうだ。鉄砲隊に深い由縁のある百人町の名はこのことからきている。

大久保百人大屋敷では余暇につつじを栽培し始めたことが始まりで、つつじ栽培が盛んになり明治十六年に「大久保

真直なる海苔粗朶の列淑気かな  
初東風や安房の巖の五百重波  
初鏡竹の清気を映しをり  
年木積むまだ現役でゐる気概

掃初のわづかな塵に舂の粒

土匂ふ七草籠の編み荒し

大杉の天辺見えず初稽古

くちばしのごとき蒼の寒椿

雪晴の富嶽一景遥拝す

寒禽の声を一つに枝離る

つつじ園」が開園して一時は一万株が咲き誇り大勢の花見客でにぎわったと言われている。

現在は外国人居留者が多い町と言われているが、「音楽の町」「楽器の町」としても知られている。

駅を降りてガード沿いを俳句文学館に向かうとすぐ、行列が絶えないケバブの店があり、それを過ぎると東京交響楽団の練習所がある。ここへはかつて市川市文化会館の館長時代に、バイオリニストで交響楽団のコンサートミストレスを務める大谷康子さんを訪ねたことがあった。

少し先へ行くと、店頭にフルートなどの金管楽器が並ぶ楽器店があり、次第に喧騒から離れて、マンションなどが並ぶ住宅街になる。かつての大屋敷の名残をとどめながら街が形成されている。

よく昼食をとるホテルのレストランも、かつての屋敷跡に建てられたもので、大きな石灯籠がある庭があり風情のあるところである。

現在は俳句文学館での東京例会の開催を見合せているが、再開されたときは違った視点でこの町を見ていただければと思う。

能村 研三

## 初蝶を

登四郎先生の最後の句集『羽化』に「初蝶を見しよるこびを声にしつ」が載っている。晩年にして少女のような初々しさである。やはり「童心を失わない」ということであろうが、この句のすぐ後に「初蝶の素つ気なく我が庭を過ぐ」とあり、老人の心に戻っているのもおもしろい。春は植物で言えは桜が、動物だと蝶がよく詠まれる。「蝶よ花よと育てられ」とあるように日本人好みなのであるが、フランスのジュール・ルナールの「蝶、二ツ折りの恋文が花の番地を探している」はとても素敵である。ただ、これを言っではおしまいであるが、私は蝶を美しいと思いつつ、ついお腹の辺りを見て大嫌いな毛虫を連想してしまう。『堤中納言物語』の「虫めづる姫君」の姫君には叱られそうであるが、何とも仕様が

お元日嬰のものだけ干されあり  
奴胤富士の稜線駆け上がる  
占つてみたくなる罅鏡餅  
枯野駆く獣のやうな息をして  
寒の餅一先づ寝かす青畳  
無造作に鯉下げ来たたる寒見舞  
釣具屋に溺れてゐたる春隣

## 蒼茫集

寒 雀

甲 州 千 草

機嫌良きみ空続きて松七日  
寒雀ことだまの如降りて来し  
釘未だ寸で呼ばるる鎌鼬  
\* 圧縮の寒風と入る地下の駅  
剪定の枝の赤々火気禁ず  
エンジンの同時録画の芽吹山

五 差 路

栗 原 公 子

色かへて予定書きこむ初暦  
小半でよろし希望も熱爛も  
\* 日脚伸ぶ五差路にかかる歩道橋  
胸奥にチエ口の低音山眠る  
風花に大きひとひら久女の忌  
同意書の署名は楷書冬ともし

地獄耳

能美昌二郎

\*冬籠り閉切り真四角の時間  
地獄耳一人にふたつ日向ぼこ  
炭焼や炭掻き出せば鉄の音  
梟の銀の甲冑着て夜営  
寒鰯を丸太のごとく担ぎをり  
海蹴つて鯨は天に登らんと

鼻濁音

千田百里

翔ぶときの白鳥に見し頸ぢから  
鎌倉の靄る右大臣実朝忌  
料峭や蕎麦湯行き交ふ一茶庵  
\*春風は鼻濁音なり甘かりし  
吾はことば牛は陽炎噛み砕く  
籠りて春夫のエプロン姿かな

御空より

辻美寮子

\*御空より転げてきたり初雀  
上越の氷柱の腰の据りをり  
ぐりぐりと鉛筆削り風邪引けり  
琴の弦張り替へますと寒の路地  
雪降り掛かる背中に裸木のぬくみ  
寄り掛かる背中に裸木のぬくみ

雪に音

大畑善昭

稜線の雲は火の色寒入日  
\*雪に音脳細胞の消ゆる音  
雪深き疎林を誰か行きし跡  
灯の消えしかまくら星につつまる  
雪飛ばす古りし除雪機なだめつつ  
人前に出て雪焼のほてり出す

# 潮鳴集

墨 絵 平松うさぎ

湖北八景めぐり大年括りけり  
氷魚汲むや湖の浦曲のひかり汲む  
山河枯る水一滴に足る墨絵  
\*端正な鬼ほど怖し寒の入  
遠吠えは山の彼方よ雪しんしん

伝 言 平城静代

深閑と銀座の画廊年暮るる  
ドアボーイの長き手足や近松忌  
大き物おほきく干して師走空  
思ひ出の何時も唐突帰り花  
\*虎落笛父の伝言かもしれぬ

晩 年 荒井千瑳子

ゆく年や読み終へざるに次の号  
今の世に紙門松と言ふ軽さ  
空まさを音して賀状届き来る  
川つくる一人あやとり日脚伸ぶ  
\*雪見障子上ぐ晩年を覗くかに

骨 太 川高郷之助

石路の花近くて遠き両隣  
木の葉散る追想なべて半透明  
晩学の二階の小部屋冬木の芽  
検温の脇のあやふや室の花  
\*裸木となり骨太の木となりぬ

熊 祭 栗坪和子

熊祭はじめは闇へ矢を放つ  
ふたいろの加賀落雁や小六月  
今年蕈たつぷりとあり子牛小屋  
烏瓜たぐり寄せれば空が寄る  
\*神渡し白粥掬ふ貝の匙

逮 富士 大矢恒彦

猪鍋の丹波の深き夜なりけり  
\*遠富士の浮力あるごと冬うらら  
寒夕焼富士を起伏のひとつとし  
彼方より狐鳴く夜の露天風呂  
大地よりひかり引き抜く大根かな

雪 道端 齊

阿と吽の睨みの先に雪催  
降る雪の千重敷く里に住ひせり  
\*しなざかる越の嶺々深雪晴  
雪深々民話の里となりにけり  
七十路の枯淡に遠く雪遊び

風 花 鈴木齊夫

旗揚げの伊豆一之宮飾り松  
しぐるるや上ル西入ル京が辻  
江戸木遣り富士を高みの梯子乗  
どんだの火揚げて砦の狼煙めく  
\*風花や遠つ淡海の照りかげり

織 細 古居芳恵

相伝の碗は金継ぎ冬探し  
\*無頓着に見えて織細ちやんちやんこ  
海苔簀あむ小屋に日当り風あたり  
干し上がる魚や冬日の芳しく  
漆黒の海の上なる冬銀河

梵 字の炎 鈴木基之

冬ぬくし幌全開にベビーカー  
赤ちやんのほひ抱つこす女正月  
\*燃え上る梵字のごときどんどかな  
ざざざつと真竹の跳る雪のこ糸  
寒晴や青のきはまる姫路城

# 飛鷹選評



能村 研三

踏ん張つてパントマイムの大冬木

石橋みどり

大道芸などで見るパントマイム、人間一人の肉体のみでパフォーマンスし、存在しないものをあたかも存在するかのように見える。全ての葉を落とした裸木の様相をじつと観察すると、その木々の枝ぶりがまるで無言のパントマイムの動きにも似て見えた。中には枝を張り根を広げ、踏ん張っているようなものもあった。作者は熊本の方である。

数へ日を追ひ抜いてゆく救急車

浜田はるみ

コロナ禍の街を歩いていると、頻繁に行き交う救急車のサイレンには普段以上に不安を感じるもの。年内の残る日数が指折り数えるほどわずかになってきたことを実感する中、年の暮れの慌ただしさの中にいる自分を追い抜いていく救急車に、益々焦燥感にかられることになった。

寒星の威をもて光り一つづつ

枇杷木 愛

寒気も強く、寒風が吹くと澄んでいた秋の空よりもずっと沢山の星々が輝くようになる。オリオン座は南の方角

に見えて、星は冴えわたり瞬く。寒星の冴えは、まさに荒星と言える風格がある。作者は星の一つ一つからくる威厳ある輝きをしっかりと受け止めた。

光り射す水の道ある冬田かな

平嶋 共代

この句、作者の平嶋さんが、南房総のあたかひ所に住んでいる方なので、冬の厳しさが感じられる句ではない。むしろ春を待つ田んぼのおだやかな様子が描かれているように思う。光り射す水の道のある田んぼは春にむけて土を耕し、稲作の準備がそろそろ始まる頃なのだろう。

白猫の碧き瞳やクリスマス

西井薫美子

猫の目の色はさまざまだが、中でも珍しいのが青い目の猫で、その美しさに魅了される。宝石や水晶のように澄んで美しく、どこか神々しい雰囲気、他の目の色よりも神秘的な雰囲気がある。折しもクリスマスでこんな出会いも神様の思し召しなのだろうか。

冬ごもり想像力といふ翼

吉村 涼子

長谷川耀さんが書かれた『想像力という翼』いう本があるが、それは別としても、コロナ禍の中自宅籠りが長く強いられていて俳句を作るにも、これまでの経験を基に想像力を翼のように働かせなければならぬ時なのである。

贅の鵜のあらあらしともけけしとも

坂下 成紘

「鵜」は「鵜飼」などがあることから、夏の季語とされているが、この句の場合十二月十六日に行われる能登の「鵜祭」を詠んだもので冬の季語として鑑賞したい。今回は三年ぶりに鵜が捕獲され、神の贅となった鵜は鵜様道中の末神殿に奉納された。「けけし」は古語でそっけないの意。

# 沖作品



\* 踏ん張つてパントマイムの大冬木

熊本

石橋みどり

セーターの袖口光る昭和の子  
噴煙の雲盛り上げて冬日和  
一時を昔むかしや日向ぼこ  
儘ならぬ風現世の浮寝鳥

\* 数へ日を追ひ抜いてゆく救急車

埼玉

浜田はるみ

雪ほたる電車ふはりと遅れ来し  
丹頂の声オペラグラスに映す  
暦果つ壁に画鋏の痕あまた  
一枝を庭より貰ひ年用意  
初鴉空を濁さず降りて来し

静岡

枇杷木 愛

\* 寒星の威をもて光り一つづつ

川涸れて一縷の水の越ゆる岩  
うろくづの走る野の川四温光  
待春の毛糸玉なり浅黄なり

# 能村研三選

\* 光り射す水の道ある冬田かな

千葉

平嶋 共代

寄する波ひく波追うて浜千鳥  
はればれと雪の匂の花菜畑  
元朝や雉鳴く胸のみどり濃し  
古里の慣ひと夫の初竈

\* ぼる市の仏像値切るをんなかな

市川市

西井薫美子

白猫の碧き瞳やクリスマス  
花八つ手隣家の赤子よく笑ふ  
ちり鍋の湯気の中なる旅ごころ  
冬銀河我が名に祖父の一字かな

\* 冬ごもり想像力といふ翼

吉村 涼子

蕎麦搔を好みし父の字源辞書  
冬三日月黒く鎮まる高野楨  
姉もはや吾より若し冬銀河  
本数多酒少々と冬籠